



とろ蜜町内会
汁だくツアー

Tosomitsu Igumairi
Shirudaku Tour

試し読み版



第一章	未亡人の誘惑	4
第二章	幼なじみのせつない想い	70
第三章	眠れる姉にいけないことを	116
第四章	レイプのような背徳エッチ	164
第五章	愛しい人に抱きしめられて	218
終章	春のおとずれ	283

登場人物

Characters

日浦 亮平

(ひうら りょうへい)

社会人の義姉と地方都市に暮らす男子校生。義姉に密かに想いを寄せている。

日浦 真紀

(ひうら まき)

亮平のたった一人の家族。他界した両親に代わり義弟を厳しく躾けている。

小山内 美穂

(おさない みほ)

亮平の幼なじみの女子校生。亮平に純情一途な恋心を抱いている。

杉野 亜樹子

(すぎの あきこ)

亮平たちのご近所さんの未亡人。亮平を妖艶な色香で誘惑する。

加藤 典人

(かとう のりひと)

真紀の学生時代の先輩。地元有数の一流 IT 企業で働いている。

第二章 幼なじみのせつない想い

1

「亜樹子さん、大丈夫だったの？」

亮平の顔を見るなり、開口一番、真紀は亜樹子の様子を気遣った。

「う、うん。最終的には……」

「えっ。最終的にはって？」

「あ。えっと……」

生真面目そうな瞳でまっすぐに見つめられ、うろたえてはだめだと焦燥しながら、亮平は必死に何でもないふりをする。

亜樹子と汗だくで一戦交えた後だった。

ホテルからタクシーを飛ばし、二人は再び町内会の一行と合流した。

町内会の面々が道の駅から移動していたのは、そこからまた少し行った先にある蔵造りの街だった。

百メートル近くにわたる道路の左右に、古い蔵を改造した商店や食事処が並ぶ、その界限では有名な観光名所。

建物そのものは恐ろしくレトロなのに、営業をしているショップはみななども、インテリアなどに洒落つけを利かせ、いかにもファッショナブルなのが当世風である。蔵の街は、観光で訪れた多くの買い物客で賑わっていた。そうした中で一行と合流した亮平は、真紀とも再会をしたのである。

「さ、最初はすぐ具合悪そうで……これは亜樹子さん、もう旅行はキャンセルなんじゃないかなって心配したんだけど、途中から運良く復活して」

心配して話を聞きたがる真紀に、ドギマギしながら亮平は説明した。

こうして姉のそばに戻ってくると、さつきまでセクシーな未亡人とエッチをしていたことが夢だったようにも思えてくる。

亮平は亜樹子に童貞まで捧げてしまったというのに、大人になれた余韻に浸る余裕もなかった。

「そう。とにかくよかった。大事に至らなくて。亮平もご苦労だったね。お疲れ様」

真紀は我がことのようにホッと大きく息をつき、改めて亮平に聞く。

（お姉ちゃん……）

そんな真紀に、亮平は改めて罪悪感を覚えた。

こんなに本気で亜樹子を気遣い、亮平のことまでねぎらってくれているというのに、その実、二人がしてきたことといえは――、

(か、考えちゃだめだ)

頬が熱くなりそうになり、慌てて自分を制止した。

(ごめん、お姉ちゃん……)

「で、いったいどこが悪かったの、亜樹子さんは」

「えっ」

戸惑う亮平の心の内も知らず、真紀は続けて弟に聞いた。

だよな。そりゃそう聞くでしょふつう、と今さらのように思ったものの、答えなんて用意してはいない。

「え、えっと……どこって……」

「……え？」

スムーズに答えられない弟を、真紀はいぶかしげに見た。

亮平の背筋を、いやな汗がツーツと伝う。

「だから……その……お腹というか、背中というか」

「お腹と背中じゃ全然違うでしょ」

「そ、そうなんだけど……結局ほら、お腹と背中がくつつくぞというか、表があれば裏もあるみたいな」

「何言ってるんだか全然わかんない」

「えっと、だ、だから——」

「真紀ちゃん」

さて困ったぞと思いなながら言葉に詰まっていると、誰かが声をかけてくる。

亮平は真紀と一緒にそちらを見た。

(あつ……)

近づいてきたのは典人であった。典人は爽やかな笑顔とともに、

「真紀ちゃん、あつちにあるよ。可愛いミニタオル売ってる店」

と姉を誘う。

「え、ほんと？」

真紀は典人に明るい笑みを返し、にこやかに向かい合った。その態度は、生真面目で生硬な亮平への対し方とは天と地ほども違う。

「こつちこつち。よかつたよ。こういう場所だから、どこかに洒落たミニタオルとか

売ってそうな店、あるんじゃないかって探したんだ」

典人はなおもイケメンオーラを眩しいほどに撒き散らしながら、白い歯を零して真紀に笑った。

「えー。わざわざ私のために？」

「いいのいいの。ほらこっち」

恐縮する真紀に顔の前で手を振ると、典人は亮平など完全にガン無視で、真紀を元来た方角に誘おうとする。

「う、うん。ありがとう……」

真紀もまた、もはや亮平どころではないようだった。

強引な典人にちよっぴり戸惑いながらも、彼にうながされるまま、一緒になって小走りに駆け始める。

「……ふう。助かったといえば助かったんだけど、なんかちよつと複雑だな」

雑踏の中に消えていく一人の後ろ姿を見送り、亮平はぼそりと呟いた。

本当なら一緒にいって行きたいところだが、典人にも真紀にも誘われていないし、ついて行くのはあまりに不自然だ。

だが、典人がこの旅行を絶好のチャンスとばかりに、何かにかこつけて真紀への接

近を凶ろうとしているらしいことはやはりみえみえなので、どうしても亮平はハラハラしてしまふ。

「——おわっ!!」

そのとき、いきなり誰かが後ろから手を引っ張った。亮平は間拔けな声を漏らし、足をもつれさせて転びそうになる。

「み、美穂」

引っ張ったのは、幼なじみの少女であった。しかもなぜだか、かなり不機嫌そうである。

「ど、どうした——」

「ちよつと来て」

「えっ」

「ちよつと一緒に来てって言ってるの」

「わたたっ」

やはり相当ご機嫌斜めのようなだ。ブスツとした顔つきのまま、有無を言わず亮平をグイグイと引っ立てようとする。

(どうしたっていうんだ)

亮平はわけが分からず、「頭の上にいっぱいの「？」を浮かべた。しかしもう一度理由を聞くのは、なんだか憚はばられる。

美穂は亮平を振り返ろうともせず、ズンズンと雑踏を足早に歩いた。

幼なじみに連れられてやってきたのは、蔵の街の近くにある大きな市民公園だ。

蔵の街があるところ自体、その周辺にも古き良き町並みの残るのどかな地方都市だったが、市民公園も緑の多い、のんびりとした場所だった。

園内には、子供たちの遊べる遊具が置かれた広場や池、市民プールの施設などをぐるりと回遊する形で、散策路が設けられている。

散策路の周囲には鬱蒼うっそうとした木立が広がり、公園は森の中のオアシスといった趣を呈していた。

「なあ。真紀姉ちゃん、ミニタオルがどうか言ってたけど、なんか心当たりある？」
美穂に引つ張られ、人気のない森の中へと足を踏み入れていた。

公園自体、蔵の街の賑わいに比べたら人も少なく静かなものだったが、散策路はずれて森の奥までやってくると、すぐそこに大勢の人が集う観光名所があること自体、嘘のような気持ちになる。

「……」

美穂は大きな木の幹に背中を預け、腕組みをしてうなだれていた。相変わらず気難しそうな顔をして、肉厚の朱唇を窄めている。

「な、なあ、美穂。真紀姉ちゃん——」

「道の駅のトイレで、知らない人にあげちゃったんだよ」

もう一度問おうとすると、美穂は亮平のほうを見ようともしせず、ボソツと答えた。

「え。知らない人に？」

眉を顰めて聞いた。すると美穂は、硬いむくれ顔のまま、

「具合悪そうにしているおばあさんがいて、なんかええずいちゃってて……そのおばあさん、タオルも持っていないみたいだったの。お姉ちゃん、その人を介抱してやってから、自分が持っていたのをあげちゃったの」

「そ……そうだったのか」

なるほどと思いつながら、亮平は改めてそんな姉を誇らしく思った。

亮平には徹頭徹尾厳しくてめつたに笑いもしない人だが、その優しさは折り紙付き。真紀ならきつと、そのおばあさんを見ていられなくなつて、そんな行為に及んだのに、違いないと手取るように分かり、我がことのように鼻の穴が膨らむ。

「ていうかさ、亮平ちゃん」

だが、そんな亮平の得意な気分は、ピシヤリと叩きつけるかのような美穂の言葉でたちまち雲散霧消した。

「亜樹子さんと何かあったの」

「——えっ」

心の準備もへったくれもなかった。突然ズバリと聞かれたくないことを聞かれ、亮平は真紀との会話のとき以上にフリーズする。

2

「……やっぱりなんかあったんだ」

「いや。いやいやいやいや」

冷やかかというより他ない厳しい目つきで睨まれて、亮平はさらに浮き足立つ。

「な、何かってなんだよ」

「しらばっくれんな！」

美穂の顔つきは、まさに般若のようだった。

もともと性格的にきついところのある娘ではあったが、これほどまでの怒りの表情

は正直初めて見る気もする。

「見てれば分かるよ。亜樹子さん、いきなり具合が悪くなって死ぬかと思ったとか言ってるくせに、別行動始める前より寿命が延びたような艶々した顔してるし」

そう言っつて、ギロツと亮平を見る。

「亮平ちゃんは亮平ちゃん、俺、悪いことなんて何もしてません。してませんってば！」
「みたいな、聞いてもないのに一人でオロオロして勝手にビビってるし」

「い、いや、俺はビビってなんか——」

「バカ！ バカバカバカッ！」

「わわっ!!」

美穂はもう激おこ状態だ。亮平に飛びかかり、大きな太鼓でも叩くかのように、両手の拳でドコドコと殴りつけてくる。

「痛い！ 痛い痛い痛い！」

亮平はひたすら防戦一方だ。自慢ではないが、ケンカなんてしたことはない。

しかも相手は、男勝りの美穂である。

「亮平ちゃんのスケベ！ あんなおばさんと、いかがわしいことを！」

美穂は怒りに任せて、亮平をしびき倒そうとした。そんな少女の怒りの鉄拳を浴び

ながら、亮平は、

(か、完全にばれてる！)

今さらのように驚愕し、美穂の勘の鋭さに舌を巻く気持ちになった。

「どうして分かったんだよ」

「認めるな！　こういうときは女がなんと言おうと、完全に否定して最後まで『何もなかった』って言い切れ！」

「美穂。何もなかった」

「遅すぎだ、バカ！　女をなめるな！　アホ丸出しの顔して！」

「うわあ……」

亮平は両手で頭と胸をガードし、巨木の周りをよたよたと回った。

「お、落ち着けよ、美穂……!!」

腕だの肩だの胸だのを容赦なく殴られ、さすがに耐えられなくなってきた。亮平は幼なじみをなだめようと、両手を伸ばして細い肩を掴む。

「これが落ち着けるか、変態！」

しかし美穂は、相変わらず般若の形相だ。まなじりを吊り上げてキーツと牙を剥き、髪の毛すら逆立てそうな怒りっぷりである。

亮平はうろたえた。

それはたしかに、すべては美穂の推理の通りである。

だがだからといって、どうしてこの娘がここまで怒り心頭なのか分からない。別に美穂に対し、何か失礼なことをしたというわけではないのである。

「た、頼む。落ち着け、美穂」

とにかく少女をなだめるしかなかった。「放せ」と暴れる細い肩をつかまえたまま、木の幹に背中を押しつける。

「きやつ。は、放せて言ってるの！」

そんな亮平の抵抗に癩癩かんしやくを起こした。美穂は激しく身をよじり、彼の手から肩を剥がそうとする。

すると――。

「うわっ!!」

「きやつ！」

思いがけないことが起きた。ズルッと亮平の手がすべり、あろうことか十本の指がふにつと美穂のおっぱいを掴む。

「ちよ……!!」

美穂の乳房は小ぶりながらも、若々しい弾力と温みに満ちていた。

しかし今のこの状況は、とてもではないがそんなことに感激している場合ではない。「い、いや。わざとじゃない。これは……あの!？」

いよいよグーパンチが顔面にめり込むかと覚悟した。亮平は慌ててかぶりを振り、弾かれたようにおっぱいから手を放そうとする。

(えっ)

彼が小さな胸乳から両手を放したのと、ほとんど同時だった。

美穂がいきなり亮平に飛びつき、

……チュッ。

(えっ、ええっ!?)

どうしたのか、有無を言わせぬ早業で亮平の唇を奪ったのである。

「み、美穂!？」

「亮平ちゃん……亮平ちゃん! んっんっ……」

「んむう……?」

……ちゅう、ちゅぱ。ピチャ。

フンフンと熱い吐息が、少年の顔面に降り注がれた。切迫した美少女の形のいい尾

翼から漏れだす鼻息である。

美穂は熱っぽい勢いで、さらにグイグイと小顔を押しつけ、唇を密着させた。その上舌まで飛び出させ、彼にも舌を求めてくる。

「あつ、お、おい、美穂……」

「いやがるな、バカ。女の子にこんなことさせて……」

「いや、けど——」

「恥かせないで。亜樹子さんはよくって私じゃダメなの？」

囁くように言う言葉は、先ほどまでの怒気が変わってせつない色が濃くなった。

「お願い。死ぬほど勇気出してるの。けっこう怖いし、不安なの」

「美穂。んっ……」

「わかってよ。気がつかなかった、私の気持ち？ わかってよ。お願い……」

「うう……」

混乱した頭で、「それじゃ美穂は……」と亮平は驚いていた。

それなりに長い付き合いになる幼なじみだったが、自分に対してこんな想いを抱いているとはまったく気づいていなかった。

(いったいいつから。ああ、それにしても……!!?)

チュウチュウと熱烈にキスをされ、舌と舌とを戯れ合じやわされて、戸惑う意思とは裏腹うらに、不埒ふちちな激情が膨張し始める。ホテルであれほど豪快に精を吐いた後だというのに、一気に股間に血が流れ、ペニスがムクムクと膨張し始めた。

「み、美穂……」

キスという行為がとんでもなく気持ちいいものであることは、先ほど亜樹子にいやというほど教えてもらった。

だが亜樹子の手慣れた接吻に比べたら、美穂のキスはいかにも生硬でぎこちなく、勢いだけのものである。

しかしそれが、たまらなく愛らしかった。せつない気持ちを持ってあまし、やむにやまれずこんな行為に出てきたはずだと想像すれば、なかなか素直になれずにいたらしい目の前の少女が愛しく思えてしかたがなくなる。

「亮平ちゃん……わかる、私の想い……んっんっ……」

「美穂……」

ピチャピチャと舌と舌とが擦れ合うたび、甘酸っぱさいっぱいいの気持ちよさがさらに股間を疼かせた。

「子供の頃から……んっ……ずっとだよ……ずっと私……亮平ちゃんのこと——」

「ああ、美穂！」

「きゃっ」

亜樹子のときにも強く感じた、度しがたい激情に衝きあげられる気持ちになる。

こんなこと、やはり本当はしてはならないはずである。しかし亮平には、すげなく美穂を拒絶することなどできなかった。

自分みたいに取り柄もない、平凡な男をこんなにも思っていてくれただなんて。

心には違う女性があるというのに、今はただただ目の前のこの美しい少女が可愛くつてどうしようもない。

「かわいい……っ、お、俺……美穂のこと……」

再び少女の肩を掴むと、背後の巨木へと華奢きゃしゃな背中を押しつけた。

「はああん、亮平ちゃん……」

美穂は少年にされるがまま、力なく幹へと体重を預ける。

（思ったより細い……ああ、俺——）

「ああん……」

亮平は、少女の着ているトレーナーを胸の上まで引つ張り上げた。

中から露わになったのは、水玉模様が愛くるしい、いかにも女子高生らしいファッ

シヨナブルなブラジャーだ。

「はあはあ……美穂……ああ、俺……こんなことされちゃつたらもう——」

「あはあああ」

二つのカップの下部分にするりと指を潜もぐらせた。そしてそのまま一気呵成に鎖骨のほうへとずりあげる。

——ブルンッ！

「うわあ、すごい……」

「い、いやん……恥ずかしいよ……」

小ぶりながらも形のいい、色白の美乳が白日の下に晒された。

小さな頃から知っているくせに、初めて目にする魅惑の乳房。亮平は、息すらできずに双子の乳をうっとりとして見とれてため息をつく。

大きさはやはりCカップ。バストサイズは八十二、三センチというところだろう。

美乳という言葉がふさわしい、美穂の身体の他の部分と同様、見事に均整の取れたおっぱいだつた。

たとえるならば、その形はまさに伏せたお椀のよう。まん丸に盛り上がる乳房の先端には、淡い鳶色をした乳輪が恥ずかしそうに震えている。

乳輪の直径は大きすぎもせず、小さすぎもせず、ほどよいサイズであった。

乳輪の中には気泡のようにいくつかの粒々が浮かび上がっていたが、その数は亜樹子ほどではない気がする。

「ああ、美穂……可愛い乳首……」

「ふえ!? やつああ……」

特筆すべきは、美穂の乳首のいやらしさだった。

ガチンガチンに勃起した美少女の肉実、サクランボのように大ぶりである。しかもまん丸に勃起した二つの乳首は乳輪より深い鳶色を見せつける。

「はあああん……」

そんな乳勃起を誇示するCカップ乳房を、両手でムギュリと鷲掴みにした。

青い果実そのままの初々しいおっぱいに十本の指を食い込ませ、ふにゆりといやらしく変形させる。

「あつ……あつあつ。アン、いやン、お願い……許して、亮平ちゃん、は、恥ずかしい……はあああ……」

（ああ、美穂、可愛い……も、もつと……もつともつとエッチにさせたい！）

亮平は鼻息を荒くして、みずみずしさ溢れるJK乳房を揉みしだいた。

（——っ！ か、感触……亜樹子さんのおっぱいと全然違う！）

愛くるしい柔乳をまさぐりながら、亮平は新鮮な感動を覚えて興奮する。

亜樹子のたわわなおっぱいは、マシユマロ顔負けのとろけるような柔らかさが印象的だった。この世にこれほど柔らかかなものが存在していただなんてと感激と同時に驚きさえ覚えたほどだ。

一方、今驚掴みにしている十六歳の生乳は、そんな熟女の乳房とは一転し、ほぐれきらない強ばりに満ちていた。その上、揉めば揉むほどさらに淫靡な張りを増し、いっそう生々しい弾力感も主張して、亮平の指を押し返すような動きをする。

「あっあっ……はうう……亮平ちゃん……」

「ああ、美穂、興奮する。ち、乳首、こんなに勃起させて。んっ……」

「はああああ……」

……ちゅうちゅう。ちゅぶ。んちゅっ。

片房の頂に、こらえきれずにむしやぶりついた。美穂はビクンと身体を震わせ、一段と激しく身じろぎをして艶めかしく喘ぐ。

指でも感じたことではあったが、美穂の乳房は熱でも出たような温みに富んでいた。そんな生々しい熱さを唇でもリアルに感じつつ、亮平は舌を動かして、痾った乳芽

をねろねろと舐める。

「ああああ、アン、やだ……」

「美穂。すごい勃起してる」

「ぼ、勃起なんて言わないで。やだ、恥ずかしい」

「美穂。美穂。んっんっ……」

……ねろねろ。ねろねろねろ。

「あああああ。うああああ……」

舐めれば舐めるほど、美穂の身体はくねりを増した。耐えかねたかのように、右へ左へとヒップを振り、エロチックな喘ぎを上ずらせる。

それに呼応するかのように、乳首の痼りも一段と増した。キュツと硬さと締めまりを増し、舌で舐めれば乳輪に倒れ、すぐさまびよこりと元に戻る。

「ああん、いや。そんなに舐めたら……うああ。はああん……」

（ああ、美穂。すごく感じてる）

美穂の肉体がどんだん発情し、過敏さを増していることがいやでも分かった。

ひとつ目の乳勃起を生臭い唾液でドロドロにぬめらせた亮平は、息つく間もなく二つ目の乳首もはふんと口に含む。

「んひゃアアア」

（おお、すごい声！）

「美穂。そんなおつきい声出したら……誰かに聞かれちゃうよ？」

「——ハッ！ ひうう……」

亮平に突っ込まれ、美穂は慌てて目を剥いた。両手を口に当て、必死に声押し殺そうとする。

そんな美穂のうろたえぶりに、亮平はますます昂らされた。危険であるのは百も承知で、もつともつとこの少女を優しく啼かしてみたいと思う。

「美穂……いやらしい乳首。こんなにガチンガチンに勃起させて。んっんっ……」
……ちゅうちゅう。ねろねろねろ。

「はあああん。だ、だから……勃起なんて言っちゃやだ。恥ずかしい。あっあっ……あっあっあっ……んむううん……」

感じる部分を責められて、美穂は懸命に口を押さえる。

二つ目の乳首は、ひとつ目以上に淫らな性感を露わにしていた。

舌でねろんと舐めるたび、少女はビクビクと華奢な肢体を震わせる。乳輪に思いきり擦り倒してやろうと、舌で強めに乳首を押せば、

「いやん、いやん。だめだめ。はっひいん……」

美穂はプリプリとさらに激しく尻を振り、乳首に感じる淫らな快感にさらにどっぷりと溺れながら、声を出すまいと顔を真っ赤にする。

「おお、美穂。はあはあはあ……」

そんな少女の敏感で、うろたえた反応によけいに昂った。

みずみずしい硬さを残すおっぱいを夢中になって揉みながら、二つの乳勃起をベチヨベチヨと^{よだれ}涎まみれに^{おとし}貶める。

デニムの股間は、もうどうしようもないほどもっこりと膨らんでいた。自由になりたい亀頭冠が「早くここから出せ！」と吠えているかのようである。

「ああん、亮平ちゃん……こ、ここ外だよ？ ねえ、もうこれ以上は——」

「美穂、もうだめだ。俺、メチャメチャ興奮しちゃって！」

「ぎゃっ!!」

息苦しさが増し、心臓のドキドキが危険なぐらい高まっていた。亮平は美穂の腰に手をやると、^{こま}独楽のようにくるりと回す。

勝ち気な少女は可愛い悲鳴を上げ、されるに任せた。

倒れまいとした美穂が木の幹に両手をつくや、亮平は少女の腰を再び掴んでグイッ

と手前に引き寄せる。

「あああん、いやん、亮平ちゃん!？」

目の前の可愛い娘に、いやらしいことをしないでは収まりがつかなかった。

ブルーデニムのミニスカートから覗く、ピチピチと健康的な太腿の震えっぷりも、情欲の炎を一段と激しく燃え盛らせる。

「はあはあ……ああ、美穂！」

「きやん」

スカートの裾に指をかけ、腰の上までたくし上げた。

大胆に露出させられたのは、スタイルのいい美穂ならではのキュッと締まった小ぶりなヒップと、それを包み込むパンティだ。

成長途上の引き締まった肉尻は、まさに青い果実そのものの生硬ながらもフレッシュな色香に富んでいた。

そんなヒップと股間を包む艶めかしいパンティは、ブラジャーと揃いの水玉模様だ。今まで激しく暴れたせいで、パンティの生地には皺しわが寄り、後ろの部分なんて、まるでTバックのように尻の谷間に食い込んでいた。

剥き出しになった丸いお尻が、プルン、プルンと肉を揺らす。

(そ、それに……ああ、やつぱり脚、メチャメチャ綺麗だ！)

締まった臀丘でんきゅうの小ささと形のよさにも惚れ惚れしたが、改めて亮平に嘆声を零させたのは、すらりと長く形のいい美脚だった。健康的に張りつめながらも、無駄な肉などどこにもない脚は、やはりモデルのようである。

強制的な立ちバツクの姿勢になっているせいで、太腿に肉のさざ波が立った。脹ら脛の筋肉がくぼつと盛り上がる眺めにも、鳥肌が立つようなエロスがある。

3

「くうう、美穂。たまらない！」

ゾクゾクと激しく昂つて、いても立つてもいられなかった。

亮平は美少女のパンティに両手を伸ばし、有無を言わせぬ荒々しきで、ズルツと尻からそれを剥く。

「きゃん!! ああ、いやああ……」

「ああ、み、見えた！ 見えた、見えた！」

とうとう露わになった少女のもつとも深遠な部分に、亮平は滑稽こっけいなほど浮き立った。

第三章 眠れる姉にいけなことを…

1

ライトアップされた河津桜は、夢幻の趣だった。

観光客は、みんな歓喜の声を上げ、誰もが夜桜を眺めながら温泉街にある川沿いの道を歩いている。

そしてそれは、亮平たち町内会の一行も同様だった。

「わあ。ほんとに綺麗だね、亮平ちゃん」

「あ、ああ……」

美穂と並んで歩きながら、亮平もまたたくさんの花見客や露店で賑わう桜の小径こみちにいた。

今晚の投宿先であるホテルには、とつくにチェックインを済ませている。

それどころかとりあえずの一風呂も、食事処での賑やかな晩ご飯も終え、仲間たちはすでにほどよくできあがっていた。

そんな酒に酔った賑やかな状態で、一行は夜桜見物としゃれ込んだ。

昼間の桜ももちろん人気があったが、見事にライトアップされた夜桜巡りも、この温泉街が猛烈にプッシュする大きなセールスポイントだった。

亮平は美穂と二人、咲き誇る桜の夜道をのんびりと歩いた。二人とも宿の浴衣姿で、上からは羽織を羽織っている。

「ほんとに素敵。私初めて見たよ、こんなの」

「うん。俺も」

並んで歩く美穂は楽しそうに、桜に向けて何度もスマホのシャッターを切った。

桜を見上げる横顔がほんのりと紅潮しているのは、決して温泉に浸かって温まったからという理由だけではないだろう。

市民公園の森で契りを結んでから、美穂は終始上機嫌だった。

誰にも見られていないとなると、ふっと淫靡かつ親密さの籠もった笑顔になり、それとなく亮平の手を握ったり、スリスリと身体を密着させてきたりする。

もちろんそんな美穂の変化に、気づいている者はいないはずだ。

美穂だって馬鹿ではない。人目があるときにはそれまでといっさい変わることのない、よそ行きの顔つきで亮平としゃべると会話をしていた。

だが、こんな風に雑踏にまぎれ、町内会の面々から解放されると、やはりどうしても甘い感情が溢れだしてくるらしい。

亮平に向ける艶めかしい笑顔は、どこまでも秘めやかだ。時折そつと亮平の指に触れ、強く指を巻きつけてきたりもする。

(なんだかおかしいことになってきたな)

そんな幼なじみの、二人にしか分からないボディランゲージにうろたえつつ、亮平はぼんやりと思っていた。

今日はいったい何という一日であろう。

ご近所の綺麗な未亡人と筆下ろしセックスをしてしまったというだけでもビッグニュースなのに、可愛い幼なじみが自分を恋い慕ってくれていたことまで知り、その上その美少女のヴァージンまでもらうことになるなんて。

(あっ……)

思わず股間で、ペニスがキュンと疼いた。

生々しいリアルさで股の付け根に蘇るのは、粘つく蜜で潤みきり、ねっとりとしたろけていたいやらしい熟れ媚肉や、初々しい破瓜の鮮血と発情汁を滲ませてひくつく、フレッシュで生硬な十六歳のヴァギナだった。

(うっ、や、やばい。またしたくなっちゃう)

気を抜けば、すぐにもペニスがムクムクと硬度を増して反り返りそうになった。

心には、この人だけと恋い慕う愛しい姉がありながら、知ってしまったセックスや女体の気持ちよさは、度しがたい強烈さで思春期まったただ中の少年を浮き立たせる。

(落ち着け、落ち着け。伏せ！)

浴衣の股間にテントを張りそうになる一物を、心中で必死になだめた。

亮平は幼なじみに調子を合わせるようにして、スマホでパシャパシャと夜桜を撮る。気がつけば、美穂と距離ができていた。見ればキュートな美少女は、少し離れた桜の樹の前に立ち止まり、幸せそうな笑みとともに何度もフラッシュを光らせている。

そんな少女の胸元の膨らみに、つい目が行った。

浴衣で隠れた股間のあたりにも、思わずねっとりした視線を這わせてしまい、

(や、やめろって言ってるんだ馬鹿！)

慌てて自分を叱責し、桜の撮影に集中しようとする。

(……えっ)

ところがそんな亮平の視界に、思わぬ光景が飛び込んだ。

少し離れたところに真紀がいた。美しい姉もまた宿の浴衣で装って、艶やかに羽織

を羽織っている。

しかし亮平が動揺したのは、そこに姉がいたからではない。

(典人……!?)

亮平の天敵が、人混みの中であるのをいいことに真紀の細い手首を掴み、どこかに連れていこうとしているのに気づいたのだ。

(な、何をするつもりだ)

何やらただならぬ雰囲気には思えたのは、恋する少年の勘の賜か。

のんびりと夜桜撮影どころではなくなった。亮平は表情が強ばるのを感じながら、人混みの中を小走りに駆け、二人の後を追おうとする。

川沿いの道こそライトアップされ、眩しいほどの明かりが満ちていたが、ひとたび通りをはずれると、途端にあたりは暗くなる。

あちこちで湯けむりが沸き上がり、硫黄の濃い匂いが立ち込めていた。

温泉街には旅館やホテルのネオン、それぞれの建物から漏れる明かりなどもたしかにあったが、それでもやはり闇は濃い。

「ちよ……の、典ちゃん!？」

強引に腕を引かれた真紀が、たたらを踏みながら典人の手で引きずり込まれたのは、

とある旅館の建物の物陰だ。

夜桜の通りからすぐ近くの旅館ではあったが、あらかじめ典人は下見でもしていたのか、真紀を連れ込んだそこは完全に死角で、しかも薄暗い。

「典ちゃん、どうしてこんなところ——」

「ああ、真紀ちゃん！ んっ……」

「きやつ」

（えっ……ええっ!!）

闇にまぎれて様子を窺^{うかが}った亮平は、思わず悲鳴を上げそうになった。あろうことか典人は有無を言わせぬ強引さで、いきなり真紀の肉厚の朱唇を強奪したのである。

「ちよ……の、典ちゃん!? んむう……」

「真紀ちゃん……ああ、真紀ちゃん！」

……ちゅうちゅう。ちゅば。

（や、やめろ。やめろおとおお!）

漆黒の闇を味方につけた典人は、誰憚ることなく男の欲望を剥き出しにした。

いやがって暴れる真紀を力ずくで掻き抱き、右へ左へと顔を振って拒絶する美しい人の口を、ぜがひでも奪って吸い立てようとする。

(こ……この野郎おおおっ！)

亮平の全身を噴き上がるような激情が支配した。

嫉妬。怒り。驚き。悲しみ——ありとあらゆる負の感情がマグマのように噴出し、今にもここから飛び出して、典人に一発お見舞いしたい気持ちになる。

「あっ……ご、ごめん、真紀ちゃん！ つい俺……でも——」

「きゃ」

ようやく典人は、真紀の唇を求めるのをやめた。しかし今度は、姉の柔らかそうな肩を掴んで、じつと真剣にその目を見つめる。

「の、典ちゃん……？」

「実は俺、この旅行を利用して真紀ちゃんに伝えたいと思ってたんだ」

「……えっ？」

「愛してる。昔から、ずっとずっと好きだった」

「——っ！ 典ちゃん……」

「付き合ってほしいんだ。もちろん結婚前で」

(な、なにっ!!)

真紀も「えっ」と息を呑んだが、亮平も思わず悲鳴を零しそうになった。

(け、結婚!! 典人が……お姉ちゃんにプロポーズ!)

「典ちゃん……」

真紀にとつても、この展開と突然の告白は相当に意外だったのだろう。困惑した顔つきで典人を見上げ、言葉を失って立ち尽くす。

「ねえ、ほんとは分かっていたんでしょ、俺の気持ち。だって俺、うまく隠しおおせてたなんて、やっぱり思ってたから」

自分の気持ちはさらけ出してしまったのだからとますます開き直るのが分かった。
「あ……」

肩を掴まれたままであることに気づいた真紀は、身をよじって離れようとする。

だが典人は、そうはさせじとなおも力ずくで真紀の肩を掴んだまま、せつなさ溢れる必死な声で自分の気持ちを訴える。

「真紀ちゃん。俺、これ以上気持ちをぐまかせないよ。愛してる。真紀ちゃん以外、ほんとに考えられないんだ!」

「きやつ!!」

(うわあ!)

溢れだす典人の熱烈な想いは、再び卑猥な行為へとエスカレートした。薄い浴衣の

布越しに、真紀のおっぱいを鷲掴みにする。

（や、やめろ！ やめてくれえっ！）

「いや、典ちゃん。何をするの。困る……や、やだ、放して……」

「愛してる、真紀ちゃん。ああ、柔らかい！ ねえ、分かって。俺の気持ち……」

「いや。いやあ……」

真紀はもうなけばパニツクである。

混乱した様子で懸命に身をよじり、典人の狼藉ろうぜきからおっぱいを守ろうとした。

しかしそんな真紀の抵抗に、ますます興奮を煽られるのか。

しかもこうした状況になると、男にとって女の抵抗などもの数ではない。

体格でも力でも勝る典人は乱れた吐息を撒き散らし、乳房に食い込ませた五本の指をいやらしく開閉させて、もにゅもにゅとねちっこく揉みしだく。

「ああん、いや……揉まないで……典ちゃん……典ちゃん!!」

（お姉ちゃん！ く、くっそおっ！）

典人の指から浴衣の布とともに、ふにゆりとおっぱいがくびりだされた。

「ああ、柔らかい」という典人の言葉に妬心としんを煽られ、目の当たりにするおっぱいのひしゃげ具合に、亮平はますます浮き足立つ。

これはもう自分が飛び出していくより他、姉のピンチを防ぐ手立てはないと思った。亮平はわなわなと握り拳を固め、地面を蹴って飛び出そうとする。

ところが――。

「ま、待って！ 待ってってば！」

ようやく真紀は力任せに身をよじり、典人の腕からすり抜けた。

慌てて典人から間合いを取り、乱れた息を整える。

獲物を逃した感がありありの典人は、そんな真紀に何度も何か言おうとして、そのたび口を噛み、顔を顰めた。

「こ、こういうこと……ほんとに困るの」

荒い息の中で、真紀は精いっぱい迷惑そうに怒気を荒くした。羽織の合わせ目を両手で掴み、胸元をガードするような仕草をする。

「ごめん。でも俺、真剣だから」

そんな真紀に、誠意を印象づけようとする顔つきになって、典人が背筋を伸ばした。「返事はすぐにくれなんて言わないよ。でも……できれば嬉しい返事を期待してる」

「典ちゃん……」

「結婚してほしい。俺、亮平くんの面倒もしっかり見るから」

「えっ」

（お、俺!）

思いもよらない典人の言葉に、闇の中で姉と一緒に息を呑んだ。

「亮平くん、大学まで出してやるつもりなんだろ、真紀ちゃん。そのために一生懸命働いて……でも一人の稼ぎじゃ、いろいろと大変なんじゃない？」

「う……」

心配そうに言われ、真紀は返事に窮した。

半開きの朱唇を小刻みに震わせ、柳眉を八の字にして典人を見る。

「協力するよ、俺。亮平くんの学費、全面的に協力する。真紀ちゃんの大切な弟なんだから。俺も一緒に、亮平くんのために働くから」

「の、典ちゃん……」

「だから……ね、真紀ちゃん。返事、期待してる。俺、今言ったこと本気だから」

闇の中で目を輝かせ、ダメ押しのように典人は言った。

「うう……」

そんな典人に、真紀ははつきりと返事ができない。困ったように睫毛^{まつげ}を伏せ、モジモジと身じろぎをした。

(お、お姉ちゃん)

亮平はそんな姉の様子を、闇の中から不安になって見た。

返事に詰まる真紀の横顔は、明らかに動揺していた。

2

「あいつまさか、お姉ちゃんの部屋に夜這いを仕掛けたりしないだろうな……」

ホテルに戻って、深夜。亮平は一人悶々と、眠れない時間を過ごしていた。

寝返りを打ってはため息をつき、また寝返りを打ってはため息をつくことの繰り返し。睡眠なんて、ちっともやってきそうにない。

宿泊人数の関係で、亮平は一人、シングルルームに泊まることになった。

おじちゃんたちは夜更けまで、まだまだ賑やかに酒を酌み交わしている。

未成年をいつまでも、そんな部屋に一緒にしてはいけないうという、大人たちなりの配慮のようであった。

しかし亮平が案じているのは、真紀もまたシングルルームを割り当てられて一人で寝ていることである。

何もしないからもう少し話をさせてくれないかと典人に頼まれたら、基本的に押しに弱そうな真紀のこと、無下には断りきれない予感がした。

だが、そんな男の甘言を信じてしまっただけではないのである。

男はみんな狼なのだ。男の自分が言うのだから、決して間違っただんかないない。

しかも、今夜はなんだかいやな予感が強くした。

告白したことで開き直った典人が、このまま一気に真紀との距離を詰めようと、実力行使に打って出る可能性を否定しきれない。

「やっぱり……様子見に行こうかな」

羊の皮を被った典人が言葉巧みに真紀を説得し、彼女の部屋に入っていく姿を想像すると、いても立ってもいられなくなる。

先ほどからもう何度、そんな妄想に浮き足立ち、行ってみようかやめようかと思いつつ続けたか知れなかったが、今度こそ亮平は意志を固めた。

行って見て、何もなければそれでよし。もしも万が一のことが起きていたなら、それこそ自分が身体を張って、姉の操みさおを守ってあげなくては。

「ていうか……お姉ちゃんは、それでいいんだよな」

またしても、亮平はさつきから不安に思っていたことに囚われる。

あのとき耳にした典人の言葉——「俺。亮平くんの学費、全面的に協力する」というそのひと言が、思いがけない強烈さで真紀の心を揺さぶった気がしてならなかった。そもそも典人は同性の自分から見ても、それなりにいろいろとハイレベルな男性だ。その上、経済的な援助まで確約してもらえるのであれば、真紀でなくてもぐらりと心が傾いてしまうのが自然な気もする。

「いやだ。そんなのいやだ！」

戦わずして負けを認めてしまうような、自分の弱気を慌てて責めた。

あんな男に愛しい姉を奪われてしまうかと思うと、込み上げるジェラシーはどす黒く膨張し、亮平をせつない気持ちにさせる。

「とにかく、様子を見に行こう」

どうせ眠れずにいるのだからと、亮平はベッドから飛び起きた。

亮平の部屋は三階建てのホテルの二階にあり、真紀が泊まる部屋は上階にある。

二百人ほどが宿泊できる大きなホテルなので広さはそれなりにあった。だが、その気になればすぐそことも言える距離だ。

そのときだった。

突然入り口のドアが、控えめな調子でノックされる。

(うん?)

亮平は眉を顰めた。時刻はそろそろ午後十一時になろうとしている。いくら仲のよい町内会のメンバーだとしても、気安く誰かの部屋をノックしていい時間ではない。

(もしかして、美穂?)

亮平はその可能性に思い至り、美穂ならあり得ると考えた。

何しろ今日自分たちは、まったく新しい関係へと発展してしまっただのである。

幼なじみへのせつない想いを打ち明けたばかりか、大事な処女まで捧げてくれた美少女が、亮平を思うあまり自分の部屋になどいられず、こっそりと訪ねてきた公算は大きかった。

亮平はドアに駆け寄り、鍵を開けようとする。

「……?」

ノブを掴んで内側から、重たいドアをそつと開けた。すると――。

「あっ!」

「遅くにごめんね」

「お……お姉ちゃん!!」

待ちかねたように部屋にすべり込んで来たのは、なんと真紀であった。

(さ、酒臭い……!)

しかも真紀の唇からは、熟れすぎた柿を思わせる甘い香りが濃厚にする。

亮平は真紀が町内会のおじちゃんたちに、飲め飲めと酒を勧められていたことをこの目でしっかりと目撃していた。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

真紀の足元が思いのほか心もとないことにうろたえ、慌てて聞いた。

「え、なにが? あー、疲れた」

しかし真紀は、何を聞かれているのか分からないという感じだった。

ため息とともにベッドに腰を下ろす。ギシギシとスプリングが軋んだ。

「あれ、すぐく弾む。まあやだ。あはは」

そんなベッドの揺れに、真紀は無邪気な笑い声を上げた。もつと揺らしてやろうとばかりに、さらに激しく体重を乗せ、自らの身体をバウンドさせる。

真紀は髪を解いていた。

ストレートのロングヘアがふわりふわりと風を孕み、波打つ動きで一緒に躍る。

「見て、亮平。お姉ちゃん、すぐく揺れてる。きゃー」

「お、お姉ちゃん。あつ……」

亮平は戸惑った。

館内には暑いほど暖房が効いている。亮平も真紀も、夜桜見物のときと同じ浴衣姿だった。真紀はむちむちと肉感的な女体に衣の布をまつわりつかせたまま、上へ下へと身体を揺すった。

(うわあ。お、おっぱい……メチャメチャ揺れてる！)

亮平の視線は無意識のうちに、真紀の胸元に吸い寄せられた。

ひよつとしてもう、ブラジャーは着けていないのだろうか。激しく跳ね躍る二つのおっぱいは、面白いほど上へ下へとユツサユツサと重たげに揺れる。

(お、おいおい、お姉ちゃん!!)

亮平は、ピクンとペニスを疼かせながらも狼狽した。

宴会には典人だつて参加していた。それなのに、こんなにガードが緩いだなんて、なんと無防備なのだろう。

(この恰好はまずいよ。いや、で、でも……うわあ……)

文句のひとつも言いたくなりながら、亮平はおっぱいの揺れに興奮してしまふ。家でも慎ましく淑やかな女性だった。

こんな風に大胆に、乳房を揺らす様などいまだかつて見たこともない。

どうやら相当飲まされたらしかった。酒なんて、基本的にめったに飲むことはない真紀である。さして好きでもない酒を無礼講だからと無理矢理飲まされ、かなり酔いが回ってしまったようだ。

「亮平、お姉ちゃん、今夜ここに泊まっていい？」

「えっ！ あっ……」

耳を疑うことを言うと、真紀はいきなり仰向けになった。

膝から下をベッドから垂らす形で、気持ちよさそうに両手を上げ、「ああん……」と艶めかしいため息をつく。

「いや、で、でも」

「ちよつと……うん……自分の部屋では、寝られなくって」

「えっ」

「……女一人だと、やつぱりいろいろ面倒ね。あー」

真紀は言うとうと身体を反転させ、プリプリとヒップを振って匍匐前進した。

「きやー」

ベッドにダイブするようにして枕に飛びつく。再びベッドのスプリングが軋み、マトトレスが真紀の身体を跳ね上げた。

こうして見ると、ヒップも豊満で量感豊かだ。亮平はあうあうと不様に顎を震わせ、浴衣越しに見えるまん丸な尻の丘にせつなく視線を吸着させる。

「お願い。一緒に寝かせて。姉弟なんだからいいでしょ」

「いや、あの、お姉ちゃん……ううっ……」

女一人だといろいろと面倒なのだと、真紀は言った。

するとやはり、典人が部屋に入れてくれとか何とか言っただけで、真紀にしつこく迫ってきた可能性がある。

それで彼女は、一人きりの部屋でとても一晚過ごす気にはなれず、助けを求めるようにして弟の部屋に飛び込んで来たのかも知れなかった。

(だとしたら……と、泊めるしかないけど、でも……ベッドはひとつだぞ!!)

「おいで、亮平」

「はっ!!」

大きな枕を抱いて「あー、世界がぐるぐる回ってるー」などと笑っていた真紀が、やがて再び仰向けになり、亮平に向かって両手を広げた。

「——っ!! お、お姉ちゃん……」

「夜更かしはだめよ。早く寝よう。ほら、抱っこしてあげるから」



(だ、だつこだとー！)

「ほら、おいで。ハグしよう、ハグ」

(メチャメチャ酔ってるー！)

ふだんの真紀なら口が裂けても言わないようなことを言われ、亮平はパニックになった。清楚な小顔は熱でも出たような朱色に染まり、瞳も艶めかしく潤んでユラユラと揺れている。

亮平を見上げる顔つきは、愛しいものを見つめるような柔和なものだった。

いまだかつてこの姉に、これほどまでに優しい顔つきで「おいで」と誘われたことなど、考えるまでもなく一度だつてない。

「ほら、早くおいでつてば。風邪引いちやうよ」

どうしたものかと立ったままオロオロしていると、真紀は「ふうっ」と苦しげな吐息を漏らし、もう一度亮平を誘った。

「お姉ちゃん……」

亮平の理性は、もはや風前の灯火だ。ともしび美穂に「ごめん！」と心の中で彼は謝る。

幼なじみに愛の告白をされ、それを受け入れるかのように、身体の関係まで結んでしまったのは今日の昼間のことである。

それなのに、こんな風に真紀に両手を広げられると、正直もう亮平は、姉のことに考えられなくなってしまう。

「亮平、ほら。ハグしてあげるって言ってるの」

「お、お姉ちゃん。お姉ちゃん……」

もうだめだと、心中で悲鳴を上げた。

誘蛾灯ゆうがとうに吸い寄せられる蛾か、花蜜にむしやぶりつく腹を空かせた蜜蜂か。亮平は

後先考えずフラフラとベッドによじ上り、真紀の手の中に身体を委ねていく。

（ああ……あああ……）

「あん、ソフフ……来た来た。やだ、身体すごく冷えてるじゃない」

「お、お姉ちゃん。うわあ……」

たまらず飛び込んだ真紀の腕の中は、得も言われぬ温みと柔らかさに富んでいた。

「風邪引くよ、馬鹿ね。もう……ウフフ……」

（うわあ。うわあ……）

少年の身体を包み込んだ真紀は、ムギユツと力いっぱい彼を掻き抱く。発熱したよ

うに熱い頬を弟の横顔にスリッスリッとくつつけた。

（ああ、幸せだ！）

泣きそうになりながら、亮平は感激した。世界で一番愛しい女性が、こんなにも可愛い素顔を晒し、自分を熱っぽく抱きすくめてくれるだなんて。

「お、お姉ちゃん」

「なあに」

「俺、メチャメチャ嬉しいかも」

「そう？　ンフフ……ほら、何してるの」

「……えっ？」

真紀は、亮平の身体を温めてやろうとするかのように、自らグイグイと身体を押しつけ、

「亮平……こっちに來なさい。こら、そんなところに行っちゃダメでしょ……」
わけの分からないことを言い始める。

「あ、いや……お姉ちゃん……？　あああ……」

「いい子ね。いい子ね、亮平……」

（ああ、お、おっぱいが、思いきり押しつけられちゃってる！）

緊張のあまり亮平は、一気に体熱を上昇させた。

たわわな二つの乳塊が、少年の胸に惜しげもない大胆さで押しつけられる。

(うお、うおおお……)

浴衣越しに感じる感触ではあったが、真紀の乳房は湯たんぼのような温かさ、マシユマロ顔負けの柔らかさを感じさせた。

その上、彼女が力を入れて少年を抱きすくめるたびに、面白いほどふにゆり、ふにゆりと弾力的にひしやげて潰れる。

(ち、乳首いいイイ！)

やはり真紀は、もうブラジャーなんてしていなかった。

それを証拠に彼女の乳首が、亮平の胸に突き刺さるように食い込んでくる。

真紀の乳芽は、おっぱいの膨らみよりもさらに淫靡な熱を持っていた。

熾おきび火さながらの熱さとともに、亮平の身体をじわり、じわりと、さらに加熱してうろたえさせる。

——いいのか。本当にこんなことをしてもらっていいのか。

夢見心地になってはいたが、それでも亮平は、この非現実的な展開に、なおもオロオロと戸惑った。

「亮平……帰ろう……ほら、危ないよ。手、繋ごう……」

「えっ……」

「くう……」

「お……おねえ、ちゃん……?」

「……すう……くう……」

(ね……寝ちゃった……!)

砂糖菓子のような甘い声で亮平を誘ったかと思うと、真紀は安らかな寝息を立て始めた。

少年を抱きしめていた腕からも次第に力が抜け、ぐったりした感じになってくる。

3

「うう……」

亮平は慎重に、真紀から身体を離れた。

彼を抱きしめるために横おうが臥していた姉と、ゆっくりと距離を取る。

(か、可愛い……!)

安堵したように眠る真紀の寝顔に、キュンと胸を締めつけられた。

いつも亮平に見せる厳格で生真面目な表情はどこへやら。無防備なまでに安心感を

露わにし、幸せそうに寝入っている。

まぶた
瞼がしっかりと閉じられ、上下の長い睫毛がひとつになっ
ていた。ぼつてりと肉厚な朱唇が少しだけ開き、甘い吐息が漏れている。

こんな風に、姉の寝顔をマジマジと見るのは初めての
ことだった。もしかして自分と一緒に眠れることが分
かったから、ここまで安心してしまった寝顔になっ
ているのだろうかと思うと、真紀に対する愛おしさは、
度しがたいまでに高まってくる。

「う、うーん……」

（あ……うわわっ!!）

小さく呻いた真紀は気持ちよさそうに身じろぎをし、
再び力なく仰向けになった。亮平は仰け反り、もう少
しで声を上げそうになる。

なぞって――。

（ゆ、浴衣……思いきりはだけちゃってる!）

酔いに任せた勢いで亮平を強く抱きすくめたせいであ
らう。

さつきまで綺麗にその肉体にまつわりついていた浴衣
の前が思いきり開き、寝乱れた恰好になっている。

何とか完全にはだけずにすんでいるのは、腰に結んだ帯
のおかげだった。それがな

ければもうとつくに、浴衣の前は左右に思いきり開いていたことだろう。

（お、お姉ちゃん。これは……!?!）

亮平は、思わずぐびつと唾を飲みそうになった。

小さな寝息を立てて眠る真紀の姿は、男の心を鷲掴みにする淫らな破壊力だ。

胸元の合わせ目が広がって、おっぱいの谷間が露わになっていた。

小玉スイカさながらに盛り上がる乳房の膨らみも大胆に晒され、ゆっくりと規則的な呼吸に合わせて、上へ下へ、上へ下へと動いている。

乳首は見えていなかった。だが、ちよつと浴衣を左右にずらせば、すぐにもそれは目の当たりにできてしまうような危うさだ。

（それに……ああ、パ、パパ、パンツ！）

亮平はたまらず股間を痺れさせた。

真紀の両脚は力なく、ベッドに逆V字に投げ出されている。

しかし浴衣の裾が乱れてしまっているせいで、脹ら脛から下は全部が露出し、太腿も内腿のほうが露わになっていた。

そればかりかパンティの一部までもが、さらけ出されてしまっている。

（ああ……し、白いが見えてる！）

亮平はリングから逃れるプロレスラーのように、ベッドから降りて真紀の足元のほうに回った。

下から見上げる形になったことで、太腿のムチムチ感やパンティのクロッチのこんもり加減が、よけい視覚的に強調される。

乳房の膨らみも、下乳部分がいつそう鮮明になった。

柔らかそうに盛り上がる丸くて大きなおっぱいのボリュウム感と重たさが、一段と鮮烈にアピールされる。

「お……お姉ちゃん……」

試しに小声で、真紀を呼んでみた。

しかし真紀は無反応だ。

気持ちよさそうに四肢を投げ出し、すうすうと小さな寝息を漏らしている。

「お姉ちゃん……」

もう一度、さつきより大きめの声で呼んでみた。

だが真紀の反応は相変わらずだった。眉ひとつ動かさず、ピクリと身体を反応させることもなく、深い眠りに落ちている。

「ぐ……ぐびり……」

亮平はまたしても唾を飲んだ。

不穏な激情が鳥肌の形になって、さわさわと腰から背筋を駆け上がる。

(い、今なら……お姉ちゃんのおっぱいが見られる！ いやいや、お、おっぱいだけじゃなく——)

あんなところやこんなところもと想像すると、亮平はもう自分を抑えがたかった。

そんなことをしてはいけないだなんて、誰に言われなくても分かっている。

自分を頼って部屋まで訪ねてきてくれた姉に対して、していいことでは決してない。

(でも……でも!!)

亮平は、なおもせつなく身体と心を痺れさせた。

いつになく弟への愛情を露わにし、力いっぱい抱きしめてくれた真紀の振る舞いが嬉しかった。

本当なら、そんな真紀にこちらからも腕を回し、抱き返したかったのが偽らざる本音だ。

そんなところへ持ってきて、この浴衣のはだけぶりである。

そして、真紀の眠りの深さである。

「すう……すう……」

(だ、だめだ……！ お姉ちゃん、ごめん。俺、お姉ちゃんにエッチなことがしたい！)
今ならそう簡単には起きないだろうと確信した。

いや、正確に言うなら、頼むから何があっても起きてくれるなよと神に祈る心地ではあるが。

「……っ!？」

もう一度、マットレスを揺らさないよう慎重にベッドに上がった。真紀の傍らに膝立ちになり、浴衣の胸の合わせ目に、そろそろと、そろそろと手を伸ばす。

(おとお……)

両手の指を、浴衣の胸元に引っかけた。

亮平はそのままゆつくりと、乱れた浴衣をさらに大胆にはだけさせる。

——ブルルンッ！

(うおとお！ み、見えた！ 見えた、見えた！ ああ、お姉ちゃんのおっぱい！)
とうとう浴衣の中から、禁断の眺めがまろびでた。

豊満な乳房が重たげに、にゆるりと震えながら亮平の視界に飛び出してくる。

ダイナミックな量感に満ちた二つのおっぱいは、やはり小玉スイカか、はたまたマスキメロンかと、ため息をつきたくなる大きさと丸みだった。

しかも真紀は、降り積む新雪さながらの色の白さも持っている。

こんもりと盛り上がる大迫力のGカップ乳房は、そんな穢れのない肌の白さも相まって、得も言われぬ艶めかしさだった。

その上、おっぱいの先端を彩る乳輪と乳首にも、亮平は痴情を煽られる。

乳輪は、大きくもなく小さすぎもせず、ほどよいサイズでまん丸な円を描いていた。

その官能的な色は、今夜目にした河津桜を思わせる何とも色っぽいピンクである。

蚊に刺されでもしたかのように、乳の頂にこんもりと、艶やかに乳輪が盛り上がっていた。

乳輪には、気泡のような粒々がいくつか浮かび上がっていて、それも何ともいやらしい。

(それに……ち、乳首……けっこうでかい！)

亮平はドキドキと激しく心臓を打ち鳴らす。

乳輪の中央に鎮座する乳首は、卑猥に勃起してガチンガチンになっていた。

乳輪よりもさらに深い色合いをしている。清楚な真紀からは想像もできないほど大ぶりで、甘く実ったサクランボを彷彿させた。

はだけた浴衣が元に戻ろうとするせいで、乳房は左右から圧迫され、いやらしくひ

しゃげた姿になっている。

乳首はそれぞれがあらぬほうを向き、真紀が寝息を零すたび、白い乳肌に淫靡な肉のさざ波を立てる。

（も、揉んでみたい……お姉ちゃんのおっぱい！ ああ、でも……そんなことしたら起きちゃうよな……!?!）

衝きあげられるような激情に身を焦がし、さらに悶々とした気分になった。

直接この手で触れるだなんて、危険にもほどがある。

だが、こんな展開になってしまうと、触れずにすませることはどうにも困難だ。

（お願い。起きないで……!）

心の中で手を合わせた。

神だか仏だかに祈りを捧げながら、またしても亮平は真紀の胸元に片手を伸ばす。

浅黒い指は、小刻みに震えた。喉が渴いて異常な状態になっていることに、バリッと粘膜から舌が剥がれる感触で初めて気づく。

（お、お姉ちゃん！）

……ふにゆり。

（うおおおおっ！）

とうとう亮平の指は、愛しの姉の胸乳に到達した。指先が乳肉に触れると、色白な乳房は苦もなくひしゃげ、少年の指をぬぷりと包む。

(ああ、たまらない)

当然のことながら、指先で触れるだけではとうてい我慢なんてできない。亮平は今にも叫びそうになりながら、五本の指をじわじわと乳肌に食い込ませ、

(うお……うおおおおっ！　すぐく柔らかい！)

もにゅもにゅと、ねちつこい指使いで豊富な膨らみを揉みしだく。

これはまさに、肉のマシユマロか。それともプリンか練り絹か。

亮平が指に力を入れるたび、この世のものとは思えないとろけ具合で、真紀の乳房はいびつに形をひしゃげさせた。

その寝顔は、相変わらず平和そのものだ。

それなのに弟の手で乳房のひとつは、いつときも休むことなく変形し、あちらへこちらへと乳首を向ける。

(ううっ、幸せだ)

天にも昇る心境で、甘酸っぱく全身を痺れさせた。

ペニスはもう、大人しいままでなんていてくれない。一気に股間に血液が流れ込み、

ペニスがムクムクと力を集め、ジャージの股間を盛り上げる。

「んっ……んんっ……？」

（わわっ!!）

ますます淫らな興奮が募り、もうひとつの乳房にも指を伸ばさずにはいられなくなり始めた、そのときだった。

突然真紀が眉間に皺を寄せ、小さな呻き声を上げる。

ギクツとした亮平は弾かれたように、彼女の胸乳から手を放した。

「うーん……」

真紀は不機嫌そうな声を上げ、ゆっくりと身体を反転させた。

4

（ああ、お姉ちゃん……!）

真紀は、またしてもベッドにうつ伏せになった。

「……っ!!」

生きた心地がしないまま、彼女の傍らで様子を見守る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリッシュノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキ
妹は
イケてる

ドキドキキアラフな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫